



沈潜文集

三十一

29  
沈潜文集

^ 5  
1139  
29









後安寺あり子鳥ころ須戸は夕に松より思ふ  
 子規なく木曾のあはれもあはれもあはれもあはれも  
 此園中水一投きくはをさみ一もあはれも  
 ありませよと後ねるはすく侍保もめ  
 半つ田妹とて二半の徳ふさふさ  
 すとふ飽ふ船花あり既ふ酔ふ酒は  
 きて茶もゆくりきりも町くひららふ  
 一とていづれをあるも心も昔の心  
 一とてふしとふ樂もおれしすら四町  
 四町の足はあはれ

明三河守日記集巻之四  
 味切誌

四町集

花

月もせぬうちをの秋明糸 管笠  
 正月の足りのそ来りむのた 三蓑  
 初むよ息さふあ合せたり 八采江戸  
 花さうりあはれ色よ度りたり 卦龍  
 とのもよみあおれうのそ御守魚 茶静

荒穴のむと半申て言ふより 江戸 史千

是よとてのけいもあがりて 尾張 春路

附て来と大急とてあつて 尾張 老樗

酒飲の味留すり後やむ 尾張 洞天

伸をいへ梅突むへを 尾張 梅令

子よあぬきの啼あり花 尾張 碓嶺

わさくれは除も程 尾張 扇和

をいへてむと汗ふくや 尾張 桐雨

るもむゆもむあり 相模 阿悪

而ほしハ教ても 京 風也

邪麻よあふ 浪 牡蓼

ほくれハおれい 浪 替雪

立たうら 尾張 沙鷗

見え 尾張 州方

ふ入 尾道 席道

ち 尾道 和切

片花わらふ志あな出する花らんか 廣島連 静雨

志らぬ人母を想ふ涙の心を雪頂

よし 静雨

静かの静かきものよしの山 玄蛙

夜あふて門を掃きぬ花巻 梅室

杜宇

子規きくく景よあつて 和切

り建ふまのあらうやわらきに 京 千崖

山向や丹波の岸よ帰るる 江戸 大梅

志川中れハまより帰す子 抱儀

菅波のゆきを汲やおとす 惟草

初より帰すやまむい 荷了

初より疲て帰るる 伊勢 白桂

子規涼山をなれて 省吾

り連ふ雪をかぐはるる 加賀 北海

啼ぬ向ハ身よ侍なり 肥前 悠

昔は是を先武藏と名づくに 文洲

さす指を山へまつや海相模の波 觀堂

淀みきり

餘さるる春多しう之わたり 三葛

昔は多火のほこ先や郭公浪花 鼎左

山風よ春を走らしし海三河の波 卓池

月

良夜の例めくふ昔の春  
床几をよそへて

竹一葉のこぼれさるるやりの月 蒼虬

晴き中川のたのしみは春ぬ月の雨 鶯笠

今いきてゆきし月の光る春須戸 西月

晴き月て青らるるきぬ月見浪卷 一宵

名月や川の舟さるる花のゆき 自樂

奥のあふる春や月の舟伊勢 菊所

牛六青のゆきも力り多近江 虚白

更了くろ縮けよあふ力り丹波 草也



雪の香や月まの孫のまことの

丹波 蕉夢

山まもの羽織光るや后の月

甲斐 野揚

名月や海ももるいもあたる

兵庫 嵐外

弱東のまつまことなりは月見

墨巢

月の入まことほく月もさす

廣島 三葛

日のうちまらくはたすあり月の夜

士方

さす汐や月様あつてもく小舟

橋本段吉 淇蝶

押さへぬく戸のあり根や月の夜

青尾

月ちう一ついやむるもうくはし

江戸 久臈

さなくの自由まあま月見く

禾木

名月やえ舟を連れはるの音

一蕙

ちの、冬やゆき見やぬくかの月

千輅

名月の木のりとい海に渡るり

聞二

大木戸や月見の人のけり

曾見

名月や月のちより月の友

遅流

気おくれのさるや晴て望の月

護物

良歌新橋のわらわは  
やうりて

芝の鏡あまつすまし一月々香 梅室

雪 鶯

よーのしをいもいれじらも 鶯

提灯まつりもあまのふき水 八朶

ふゆちをちをちへてり雪あけ 素英

初雪よこし梅をく照りく事 秀外

酔覚やえん向ふあぬをあり 常陸 香

大雪や内てて飛山仕る 三葛

雪のねや草をさう音の耳ぬ 鹿太

酒くとあまの房は雪をさ 多代

初雪や起てんふれ人の由と 漫

半をさるをさのつをさるの垣 京 吳明

灯をさるをさるのつをさるの垣 伊与 石渙

大りしれく崩きぬや枝の雪 浪花 一宵

真帆かうら入也む雪の影路水 廣島連 可那女

斜の月をよむや戸口の雪のり  
積雪の侍所やほるる年  
思流  
和切

歳旦

うち中うあう起て花の春  
元日の不二や一束よ出くあう  
えりや新まきるりの生身魂  
と月さりとまらえりの胡中が  
元日や花もめきたまのころち  
浪花 五韻  
江戸 應  
一具  
小圃  
三葛

雪とてり船きやま新幸ふ  
水合をたくひはれを沸くり  
子のこらよ植て度るや福あま  
法いさよ堂の輪くさりさう  
羽子づくや人のをしあるあな  
厄明て先つらふや初  
大姉くん心をまめすまめ  
吾よあうしてあうや福壽子  
三河 赤守  
陸奥 曰人  
近江 楓下  
石鼓  
廣島連 甘古  
曾外  
文衣

はるの戸は 凍るつらさを 経度る 春 山川  
笑はくも 事よりぬつ 心児の 顔 陳影  
日移りの よはよま ころの 色 駟驥  
書知よむ 久ハ 経ある ころ 筵史

初春

雪の ところを ころり ぬ 露は ころり  
雲むら や 出る 夜 度 伊勢 雲石  
ふるよれ 八 耳 利 あり 音 椿 鶯丘

片足ハ 不二 子 かな 小 松 実 伊豆 一 瓢  
大 あり の 松 実 ころり 成 ぶ き 宗 三 萬  
ころり の 海 へ ば ぬ あり 梅 の 心 江戸 ち くり  
枝 村 へ ころり つ ころり や 夕 柳 幻 芝  
ころり 人 又 海 ころり ころり 梅 の 書 三 崎 女  
大 枝 を 伐 てる 透 ころり ぬ 椿 ころり 詠 歸  
青 柳 や 船 ころり あ 暮 る 采 多 ころり 在 ころり 死  
ころり の 末 ころり 春 三 郎 や 郎 ころり 菊 相 摸 多 久 丸

落合ふや夜の中のをりありあ 京 梅通  
おあつれて来るや遊帆きり船 貨僕  
針をきれり言きて仕舞ひたり 苜舎  
あて来とよつさや梅の折あき 十海  
しつ事のならふ年問ふ子りあ 橋津 鳴々  
知ふらうそへて梅ぬ玉筆 浪卷 岱年  
言ふそあつたれそ二二 尾張 秋蘆  
三言あうらむむす三言遠く 梅理

言ふ来の多き言 筆危ら南 近江 士明  
旅きれハ旅又付来る柳々 武藏 滴堂  
不便利な道さへあれハ梅のむ 煮明  
山椿をくく咲てさすいり 陸奥 与人  
ちり付いいくつあつてく持らあ 三河 青可  
病ふをさありの通る柳々 常陸 兆  
言の氣入て居れハ鳴より 相模 花杏  
幾心船とよめいらつて柳々 越后 梅里

陽たやや霜さる麻の熟男よと 上毛 可布  
 突やれい砂ふかりうり春のふ 因幡 佛兄  
 藪入のそとあつふや中をねの 阿波 太拳  
 雪やみしるたせぬさのたり 石見 三篤  
 山笑ふ影のさすあり人の脊 宮島 北麟  
 や浦際ふ小社ふくへ梅のむ 廣島連 藤彦  
 塚さとの遠入穴あり落椿  
 澹持の沖沙や梅のちる穂先 月湖

心ゆく夢散霜さめの後とを 休行  
 実より八婦人よもつる小招ふ 一巨  
 あと屋うしく接せぬ 雨砌  
 影ゆれて雪の飛のく柳う 蘭陵  
 小後のはなりの影や梅のちる 素白  
 仲吉  
 初出ふふい出す照の鏡子 京 榛堂  
 喜中のふふり雪るや花う 完和

見多ふ目先へおろるひをりうを 京 芳英  
 茶を焚けと細うらひや蝶の飛 阿波 鷗里  
 籠子鳴やすへて一里う五中町 伊勢 在淵  
 初さあらえんしと操けいし 浪花 奇淵  
 明籠子よ多やううさうりわう茶 祇白  
 船路の初も居る春は月 眉岳 三河  
 上京や中を春のあけは梅うさ 塞馬  
 珠縁さも松よおとくし 摂津 太乙

浴きつて春れぬ多又なく蛙 三葛  
 朝なりしと舞の先ありあく桂 卓郎 江戸  
 月と鳥合せて良きや春うさ 岩壽  
 春の猫の連しと鳴より 風盤  
 けい例よ居あうう人の初梅 台く  
 同しやうよありし春の親子 下総 雨什  
 帆交後のあまうら上やゆ 宮崎 一固  
 浮くし月仏とま 吉田 初梅 南亭

廣島連

菜のむや女房持事たる様芝居 田影

ゆく構えんきくふりかへし飛蛙 鶴居

んくうれすうや鏡子の字をり 蘆洲

暮春

木の根もちとくふさぎ 荳 京 月峰

むつはりくしとあふりや厚麻 行脚 初六

茶番や流るよらより毛糸のり 茹来

子よくくく 萱も梅寸角力取 三葛

後継又つくりく 孫生り茶 江戸 塊貝

層家根やたういしんい 又柳のむ 雀布

かろくもの垣伸る 萩の籠 月 洒一

組合つて舞宴ふてきる 長巻 兵庫 徐全

あふくふ子際も半くまぬり 永弘 越后 萱水

落すより人めよく川や 荻の角 下毛 月三

くる層よりてきる 春の背 下事 石見 素雲

のけハ長一 雲の短一 舌のむ 武藏 天由



多かりと雨のふりく降より  
行脚 秋菜  
 様人を寄てるや枕のむ  
下巻 四明  
廣島連 鳳郎  
 休所の掛座の下や木瓜のむ  
 一河  
 府へきてんさし茶搦の唄のさば  
 野川  
 引寄や鏡のむさ茶明を  
 柳溪  
 鳩の川あささうさや菜の燕  
 額鶯  
 家館とらむや柳もよい不  
江戸 不及  
 渾火の寂ふく強く春の由く

初夏

隙くう取きよあより更衣  
浪谷 福米  
 紋付の一度て降し程うさ  
 三葛  
 神酒さけて二人はれま程うさ  
江戸 英峨  
 東風うへへ吹おのむの扱明うさ  
 樹村  
 牡丹見ゆるやも近よるやあふん  
 卦古  
 足袋ぬいてせしあうるあうんか  
 麻更  
 ちる花とよよあうんか  
行脚 蒿居

海中へ走りてまふ飛行脚 麻子 蘆山

寺うらいたやけ汁やうたつて出羽 太橋

吹ひけりあひつるぬわしんか三河 波文

茶はくさやわらぬのいふき墓子桶尾張 烏律

さし向ふりねくちり近江 初相奥 月坡

初茄子三りもあて十ラ掬ふ丹波 三萬

から池もある大庭のあなうか行脚 柳絮

鈴壺をむ首んきて杜茶 乙

寺の灯の毎夜さちし新樹陰浪卷 井眉

郭漁の味やあまの一二尾道 陶然

紅糸すもさし久し死可部 茂りうか 木居

志川くりとく多る日和や廣島連 後時 白尔

出磯きく桶屋の通ふ騰 雨

茂りくち柳ハ苗のさめもあ月 古

是し那の戸口くえてる茶乙 彦

よる行となうひよあめ満 女

拵るれやう又小傳の麻の子 玉可

仲復

駿河路みく

み月あや 夜中ハ不<sup>江戸</sup>なまきの塚<sup>江</sup> 對山

うそ<sup>江</sup>道ハいよ<sup>江</sup> 疎る<sup>江</sup>さき<sup>江</sup>う角 有月

おと<sup>江</sup>蚊の枝へ<sup>江</sup>透<sup>江</sup>て<sup>江</sup>遠<sup>江</sup>入り<sup>江</sup>架 未白

ふ<sup>江</sup>川<sup>江</sup>み<sup>江</sup>つ<sup>江</sup>萩<sup>江</sup>あ<sup>江</sup>ま<sup>江</sup>とり<sup>江</sup>て<sup>江</sup>増<sup>江</sup>草<sup>少年</sup> 春蝶

豆<sup>江</sup>の<sup>江</sup>蚊<sup>江</sup>の<sup>江</sup>志<sup>江</sup>川<sup>江</sup>より<sup>江</sup>見<sup>江</sup>ぬ<sup>江</sup>る<sup>江</sup>陸<sup>江</sup>子<sup>江</sup>が<sup>江</sup> 三<sup>江</sup>萬

湫<sup>尾張</sup>の<sup>尾張</sup>多<sup>尾張</sup>た<sup>尾張</sup>作<sup>尾張</sup>の<sup>尾張</sup>子<sup>尾張</sup>貫<sup>尾張</sup>じ<sup>尾張</sup>り<sup>尾張</sup> 而<sup>尾張</sup>后

風<sup>京</sup>さ<sup>京</sup>れ<sup>京</sup>ふ<sup>京</sup>舌<sup>京</sup>や<sup>京</sup>六<sup>京</sup>の<sup>京</sup>線<sup>京</sup>売<sup>京</sup> 梅<sup>京</sup>價

か<sup>浪卷</sup>る<sup>浪卷</sup>あ<sup>浪卷</sup>ま<sup>浪卷</sup>し<sup>浪卷</sup>火<sup>浪卷</sup>勢<sup>浪卷</sup>亦<sup>浪卷</sup>て<sup>浪卷</sup>あ<sup>浪卷</sup>り<sup>浪卷</sup> 林<sup>浪卷</sup>曹

字<sup>武藏</sup>の<sup>武藏</sup>戸<sup>武藏</sup>や<sup>武藏</sup>恒<sup>武藏</sup>ぬ<sup>武藏</sup>る<sup>武藏</sup>ら<sup>武藏</sup>う<sup>武藏</sup>ら<sup>武藏</sup>あ<sup>武藏</sup>る<sup>武藏</sup>音<sup>武藏</sup>扇<sup>武藏</sup> 蟻<sup>武藏</sup>兄

と<sup>下総</sup>こ<sup>下総</sup>さ<sup>下総</sup>も<sup>下総</sup>よ<sup>下総</sup>い<sup>下総</sup>か<sup>下総</sup>ま<sup>下総</sup>め<sup>下総</sup>り<sup>下総</sup>そ<sup>下総</sup>夜<sup>下総</sup>の<sup>下総</sup>忌<sup>下総</sup> 天<sup>下総</sup>年

等<sup>行脚</sup>方<sup>行脚</sup>の<sup>行脚</sup>植<sup>行脚</sup>子<sup>行脚</sup>の<sup>行脚</sup>疎<sup>行脚</sup>る<sup>行脚</sup>門<sup>行脚</sup>田<sup>行脚</sup>の<sup>行脚</sup>末<sup>行脚</sup> 松<sup>行脚</sup>什

最<sup>伊勢</sup>陰<sup>伊勢</sup>や<sup>伊勢</sup>蚊<sup>伊勢</sup>を<sup>伊勢</sup>も<sup>伊勢</sup>さ<sup>伊勢</sup>つ<sup>伊勢</sup>さ<sup>伊勢</sup>り<sup>伊勢</sup>郊<sup>伊勢</sup>仕<sup>伊勢</sup>子<sup>伊勢</sup> 三<sup>伊勢</sup>槐

病<sup>伊勢</sup>と<sup>伊勢</sup>治<sup>伊勢</sup>も<sup>伊勢</sup>あ<sup>伊勢</sup>り<sup>伊勢</sup>て<sup>伊勢</sup>蚤<sup>伊勢</sup>飛<sup>伊勢</sup>子<sup>伊勢</sup>の<sup>伊勢</sup>こ<sup>伊勢</sup> 淇<sup>伊勢</sup>石

二階より蚤ふる山常陸涼谷

牛の子の出るやけさるも面ふき行脚青隠

子もふもそへ悔りう放すさうな 桃五

夕色の下りう来るや強くそり 春休

夕色や初夜しまる土堤のうへ 三葛

並りえる度又故の飛脚来るか肥大村春圃

石もさるもさつと吹りりまふじ加斗桃泉

細風や浪たへあやめも腹さ倉橋也籟

あゝえ——牛の小屋やまふあじ廣島連鶴煙

牛極りあしのうさる小庭うあ 一花

ま〜〜と様の糸をよ遠ふさうあ 白太

ふ〜さう〜苗やゆり田の極切者 碧尾

ま〜さう〜ちりたへせ海—丹波先の門 武陵

暮夏

涼〜さう 初蝶のたうさなまうあ江戸 啓山

ぬげたを池てふさう〜 櫻のさ 真齋

あけてこころを返す夜の露江戸 謝堂

夕べの月をたまたつて居るお竹の枝 藍溪

祇園寺や都よりをあれて松の月 竹魯

宿乃月の敷をさぐる急可車 尚重

腰にけさふくけもあつてさきの峰京 並隆

蓮の雲の障子ゆれいさゆれりてあう女

涼しきささきとさよこり粉の吹近江 申齋

夏の雲の月や湖のさくら舟伊与 郊馬

朝霧のぬきこもてけふまき柳石見 梨雪

粉のやまふもよ近く小涼り讃岐 茂推

くまの鳥はかきさや粉の常越前 振々

暮さるる人の揺りり蓮三 三葛

むとぼけいおられてさく庭のさ加手 挑淵

粉まきの目のあつて星のなる倉橋 篤民

あかきもうつしと眠く水守り廣島連 江九

ぬきほつ子りぬ通い口鹿 鹿尾

廣島連

何風も吹ぬき動くまき田々南 楚琢

菅ふぬのみうー先ありりる子 芝猿

うー山ーまき田の中の静と静 歩月

朝陽のまき田ふさあき静と静 兔水

折火もまき田の静と静 石哉

星の光りふさあき静と静 嵐夕

持やうの心は似てる扇の静 雪曉

秋の光りふさあき静と静 小笠

帷子の舞の静と静 三葛

向うの静と静の静と静 萬籟

初秋

物静と静あきくーく静と静の秋 一嘯

あきく静と静あきくーくや静の月 蕙布

あきく静と静あきくーくや秋の風 大筥

あきく静と静あきくーく天の川 三葛

七夕やまき田の静と静あきくーく 何九

燈籠やとくめぬ心りち 江戸 丁知  
 引守もよ川をささむ木柱ふ 可大  
 きの香投く定あり 立居  
 秋の川や道り人のふたれ 浪卷 松隣  
 秋風や夕日ちろく 豊前 櫛のく 月壺  
 とつらりと一日降て 播磨 曾夢  
 秋風よくくぬ 武藏 杜人

後河路より

詠と来て稲と披すや富士れ 三 鷲  
 足のうらちめく 行脚 萩の房り 祖郷  
 伴の事もあはれ 因幡 存く 寸風  
 書椒をうれ 上毛 年ふ 樗道  
 羽衣の 信濃 影も 若人  
 情の 肥前 心 其映  
 真賣の通 三原 道あり 綾輔  
 涙も 三 鷲

折るる枝よむらさき木槿廣島連 筵史

実あて秋風光る塚の土一鳳

くく出の枝咲のあま木槿青霄

世の中の露りのこ縮のともふ露宿

雲あひて露出るお藪の穴菊年

とり火の影のひかりさくさく斗齋

仲煉

一垣の枸杞の實はえて江戸 禾葉

きらい日のをりくはきす笠笠

麻葉や踏つりては秋の香上毛 可布

初丁や煮てるの志はく七八羽肥前 三葛

八月やふゆ心よくてらぬそら肥前 菊也

あれ蒸といふうち草の動きより浪卷 一分

萩雪の子供浪卷 欽雅

心あて力とくぬ若狭 子々南 壽堂

子孫の香や露白長門 益三

林三



庚申の雨のきりふく 後の孝 備前 翠兄

ちかてうとくられハ一むれやうも 廣島連 玉相

群て来てハ消虹やえの丁 朔二

一むれ又えの馬むやけりも 歸止

うらむう鏡又うつる 照奈う南 橙井

枝総て根畑垂る け子り南 三葛

傘をすすつてまきり 夢の晴 讃岐 夢蝶

絲のきりこころ 丹波 俵瓜

清き川ふりて細きさし 宇治 一路

月のきりこころ 行脚 梅窗

暮秋

先秋ハ長し小菊のつる 近江 霞洲

きりさやや漁村のあけ 浪谷 醉茶

あけりて樂書 削る 其流

引あけ 繩のちりや菊のむ 下谷 其翼

うら枯ハきりけるより 雨塘

九月十日  
京極殿結草のうらまへ

三葛

鹿洞

文艸

春川

雪頂

初冬

得蕪

志くくや又くさ合守孫うら  
江月  
土蕪やまゝ一板印のく  
南濤  
今西の障もまゝに枯尾屯  
一樓  
裾もく傳るまゝや神去月  
斜道  
葛城の神もあハて楷火々  
武藏  
取付よ虎骨場のある枯母系  
尾張  
大巢  
外をまゝやまゝをまゝおゝ大根浅  
月底  
降音のあゝ余りくくまのま  
信濃  
叢

冬 下総 滄水

冬川 行脚 雪笠

未 廣島連 三萬

打 素臺

冬 映月

難波 江戸 笛子

埋火 淡路 始丘

冬 伊豫 素槲

満 西条 柴籬

教 廣島連 雪底

煮 左逸

お 霞小

本 僧 如雪

冬 物皮

仲冬

山 近江 閑齋

起外の音のうせぬふまうふ 江戸 雪窗

ちの下の結裏へあつてうくとけ 砺山

炭くへてせり清くも燐火くふ 豊后 三葛

羽織もくまうえてるやあ毎 伊勢 路方

三ふし川竿うのほくく 和泉 松波

又池をうくく小水くく 和泉 成風

初巻又せぬ鳥くく 廣島連 三葛

秋神乐の文りさるや 西条 橋二

糸物のまよふまよふ 和泉 半有

流りりり 和泉 維石

巻放す 和泉 凡路

移の一羽 和泉 十千

十 和泉 裁暮

せ 江戸 小圃

筑前 雨堂

上毛 七人

ねら買物ハ世うして年のくれ 三 鷲

年のくれ 武藏 寶水

解つさや産まハ松の春あり 江波 江山

十分ふ年のそありま 廿日市 花勢

石ふのぶくて娘ハや路むしち 舊島連 山川

露地書ハ喜より障か原走うか 花菱

早の春ありや又ハ智り早の春あり 壽得

と一越やすしてまめく 菅 簪 西宇

持ちめてめでしきり除水の鏡 三 鷲

との辻もあま客のうらやま京 榛堂

雑

浣女戯平沙  
浴童争浅瀬

とりあを能なりあまなり 三 鷲

砂ふ又洗はもあこまなりと 作者不知

ああむる子の ぬてはなりあま

東都梅や一に遊覧二句

常々此の梅とたりや梅をや

鶯笠

梅よそそえたりとめしれす夕さる

三 鶯

無はとて不無よつても此の鳥を  
うきとてあつるは法妙の鳥よ

教るむのくさふて空月れらる

素 志

いつく〜 ぬ大元

鈴音よ花のくさるを石り南

三 鶯

上野の漫遊

くさる天の詩文よの鳥いふ  
むらさきもろくめはとつふあつめ  
えもいふれは群をあのかりん  
わらさ木ののこよは延ちあやむ  
あはれをやいふのくさる

さとりげふや人をさやしふものめと

鶯 笠

角田川のわたりみて

境清のさつらも提さしあひんうふ

三 鶯

わらさきもろくめはとつふあつめ  
ようむしをなむを拂へはこふ  
思ふうこれハ教感の墓は漏れ  
りり重傷のあはれをさる

用お想ひし今も口なまきも  
お平の和まおるるも

後へさやあつて信り夕ひそり

玄蛙

風は先流は先あるり  
せは雁よこしとまの  
をさるる

洋やぬきものしりまのまよひ

大梅

伯耆ある大仙の坊は海して下山  
あしを吸のあまの  
まのほの神のまよひ  
はくつるをたて  
信り信り

りくまよふ  
うけつる  
名所を  
はあしり  
十

疲はぬも踏こえせ梅あつたの山

和切

今おらりー甲おまの  
とありー  
お方の  
流く  
子

ふにもりもかき初給

三葛

み柴あまのりあふるや田子の浦

秋の旅

三十石の舟のありつる

もたれ秋もはのほろにゆて

心もぬてあふよこしあま天をさか

秋旅山

松くらしきりの秋も秋の音

定律の山

山あふりや近しつらしてさかまのむ

箱根山のあふをれと池上か

やふ二子山約嶽を向ふ

冷ましや池よせし二子山

同様の人取の雲を拂ひ襟えの

拙るあまの命のまね 舞の南 素心

泉岳寺我士の墓を訪て

月もりぬ光りの流しや葎の家 三鶴

隅田川文波を向いてつらね

す川あふをぬきりふるのせく月見か 鶯笠



陸奥の権勢の松苗をうつり  
植るいーいりゆくとせうとせう  
とておのつらふ代経つてみよの  
りつちあるしーいすけし神代  
かみん位の志きよるかきく標た  
しーとあきらんうーいーい

古くもかくてやあらん松は月素志

松苗のつらふ代経つてみよの

りつちあるしーいすけし神代

四町集負外

雀まやあをぬくんでん連て

梅室

あさぬあらのあふれ出道 三葛

あさぬあらのあふれ出道 三葛

あさぬあらのあふれ出道 三葛

あさぬあらのあふれ出道 三葛

あさぬあらのあふれ出道 三葛

蛤の壳ても初道く大荷會  
 啼を一ついてまの作をさ家  
 呼くいぬけ糸を中の様支度  
 女ちうらよあうぬを記出  
 常不路煙くまをよ物葱  
 ちうらあうらのぬく一丈  
 糸付をを違つちる層有取  
 け器縁の露よのくも

室 葛 室 葛 室 葛 室 葛 室 葛

清空と下総梨の多多りち  
 形テふふくおろす肥擔桶  
 ちあうてくよをく破り寺  
 眞の口は蟻のつら出さ  
 初缸の山へあうりて啼をまん  
 聲も持<sup>モッ</sup>氣もおれ附ふり  
 鏡をぬけくちくあうり  
 鏡をぬけくちくあうり

室 葛 室 葛 室 葛 室 葛 室 葛

あつりのきつりつて門邊を  
 州せきまきもかきまわりの  
 深き屋も四五間りの深さ之  
 ふりの好まむゆる松の形り  
 位階とまわりの言記の化粧  
 口疲りくま神のちりりた  
 待ぬおの木の枝も月高く  
 胡麻刈りも忘れりりりりり

室 葛 室 葛 室 葛 室 葛

引板の縄さいくつ密てなるまや  
 時をよあひす雲せの入相  
 ちりりとあくて度送り狼  
 序言通りくつ哥又いふまむ  
 きのめかひりあひ七かめつむ  
 掃除くぬまの葉の下

室 葛 室 葛 室 葛 室 葛

各十八句

三十一

降りむハきよ又咲来ぬありたり

三篇

去意ありけり雲の香のきほ 鶯笠

葉道又提と小春培壺きり 鶯

蟻の居ぬけりよいけり 笠

惟子のきぬきをやる言の内 鶯

舟で漕ぎて通る町中 笠

飛のりのあつらへてハほをきり 鶯

何ふけり書て初めけり 笠

日響けりけり焦る色よちり 鶯

春中けりけりきりけり 笠

鏡架けけりけりけり 鶯

風をぬきけりけり 笠

小牧の肩をきりけり 鶯

揚子江をきりけり 笠

初雪のけりけり 鶯

河掘りけり 笠

三十一

冷雪のまじく通る層子履  
 門連しきり万也きりふ  
 杉門ハ盤や鞠もちうまうす  
 平ゆさーりも気後ふまは  
 仔細切し七子造のまやりちり  
 ちつとよあつてハ梅の淡く  
 焙すもうゆきの返るぬまうぬま  
 鉄<sup>ア</sup>カ<sup>ツ</sup>カ<sup>ウ</sup>多き 音く 嬢の中<sup>カ</sup>云  
 葛 笠 葛 笠 葛 笠 葛 笠

溪唄をまきふきる小晴る  
 あんまり降るぬ路ちい冬  
 神の田を居あふきあぐぬの都  
 近い橋へ五六了ふと  
 月交度掃除車形の清持ふ  
 刈穂のあふふ斗る砂採来  
 錫杖又はいと穂吹のまらり  
 葬場の灰の風よちりか  
 葛 笠 葛 笠 葛 笠 葛 笠

理屈屋つとぬるふいり

笠

代り合ふも草うぬる

葛

穀物の松子ふつと小ぬる

笠

春の草——の他と苗代

葛

家陰や多しふとの菜も花よなる

三葛

空野さふ引うぬる

鴨梅室

二寸ふも足ふ小飯を焙らせて

葛

病のゆりしとぬ御中殺突

室

後通りふ撥桶も草も出寸月

葛

張札さけらふ萩んをり門

室

鳥の草丸洗ひとさうをさり

葛

寮司ふふれとやをり色めく

室

昔蒲湯と草ぬりも急うきて

葛

京つりとい天をさうり

室

月けりらる種うい核皮着

葛

九十のち食りよも出てゐる  
 喰ものふたのそとある月の歌  
 十した州もをいんまゐるさと  
 糸るやう地元の笠の羽うた  
 少しり様まゐる音きんこ家  
 安流川の船さへ多いお祭り  
 即ち度あうハ喰の汁  
 出るも糸るを賣のまゐる

室 葛 室 葛 室 葛 室

平路地も二階も不踏々切  
 けり止く様のいふふの年増ふ  
 沢山ささる清みともせ思  
 魚の血のほりておぬは穀附米  
 横波房りの陸ふりをとむ  
 魚想まゐるやうな糸針かりふ米  
 思ふふのささるぬ新 宅  
 照月と芥をうりておぬ櫓

室 葛 室 葛 室 葛 室

蕨のつら子よ人の多きける  
 栗くふく平らるる遠く山三里  
 東をたふす家なき者居る  
 仲季も玉鬘の能を傳へる  
 栄漬おとす利りぬ入海  
 轉くる義表なきよの屋り  
 初穂光去上りら出歌  
 夕の西をむのくめよは武湯  
 室 鶯 室 鶯 室 鶯 室 鶯

一 反はらもくえる茅 種 草 鶯  
 系控てまゝと移りてありたり  
 惣けらけりし種みしゝ教のる 榛 堂  
 おもひ煮るる花の通はよ旅きて 蒼 虬  
 ぬきあり等よをさむ手 拭 祖 郷  
 小利はよ結すもくきり内秋 夙 也  
 板の木の陰にありし出た 貨 僕

三十一



折あて浄奥の芋莖挿へたり 梅通  
 床の暖簾もまつむ桐 終 符舎  
 かつふくまきと巻くうらると巻く隣り 南溪  
 茶を汲むとけも婷乃ちあふすけ 十海  
 世話ありあふ家の思ふは考讀 完和  
 浪いころしくて海一津 唱 吳明  
 字難をくゆまなくあふ空の月 流芝  
 濱へ入れくる浪の梢 後 卓池

ちつそりと赤帽船の巻るあは 一肖  
 唯一ふくて、巻く、白、瘡 福米  
 手料理の糸あ提へむの中 眉岳  
 挽くまであふ板乃あふ、う 自樂  
 初皿乃ちんめり編る古あふ、 醉茶  
 入腹を序よ鐘体か食すろ 雪頂  
 日向ておふ自由ハ今の一笑ハ 和切  
 灸取ろとわれとむことおろさす 映月

及古よりあはぬはのとも、般ちのし  
 子るの 通し入野の 換心箱  
 素木縁の 葉又砂の くらむこ  
 杖ふとくれ 牛の 伐り採  
 子髪らるる へとやそり物 忍ま  
 室の 掃いをも 船てと 地けち  
 むら隊の ありは 月の 層くも  
 空より 後と 袴 急つけ  
 素臺  
 霞下  
 田影  
 物皮  
 静雨  
 月湖  
 江丸  
 阿那免

幕の 後りう 紺み 咲りたり  
 紙 燭め きれを 引たり 蛾  
 法印の 不針も 経連きりて  
 くらう びるの 葉好く くら  
 糸を ちとて 採されぬ ちを 琴  
 田より ありれて 舟に 花を ちとて  
 思流  
 雪底  
 月古  
 淇蝶  
 甘古  
 維石

歌僊表之部

三葛

折釘は熟すもあふや唇種袋

口收はむ龍は翁はけしこむ 禾木

碓の香を吹め柳のけしこむ 梅室

家をちりれとやそり町分 葛

辨當の葉を月見を小巻とも 木

露の土中を新鞘の海老尻 室

人去き即ちゆきみしきやちりる 梅室

熊くともあつと出る 月三葛

いぬくともいつり巻目の帯巻て 大梅

るの付みやる子をひきさる 久臧

免川よりと知れんゆき藪の下 八朶

一里の留ふ二夜を寝るを 一具

送別

屯の月不二ふ柳をちりりも 玄蛙

羽まゝく 野のほろいありら 三 鷺  
 瓜の芽の二葉よむ 露のを初る 鼎 九  
 後よもんも魚 野の書さし 蛙  
 そとくちまのこくあまふたむ 六 鷺  
 沼のよほひのこ魚 白 八 九  
 半の川えらふ小一里持やはほく 筵 史  
 馬うらあうす 鈴 三 鷺

穀 謝 右 春 の 露 意 け 志 三  
 野 投 投 入 塚 あ 一 の お と 史  
 舟 の 比 西 片 竹 も ち り り 糸 八  
 稲 子 子 竿 下 三 入 山 竹 三 鷺  
 法 や く と 葉 ち ち あり 秋 の 三 見 木  
 む さん と の ち も 半 秋 池 三 鷺  
 繩 張 の 内 も ち り 糸 子 ち ち 卦 龍

さびしくも多む 役先の奴 佳木

朝飯をくらやいおの力交後 三葛

地改ら来てもあつた身山 龍

三葛

今暮く候のあやめ 能 常のま

いそれとましく 出さ 梅 福 砺山

田舎者よ京町の夢切をめさ

ちつとの花もらん 田舎 鶴 山

名月の故障ふんもさうりさう 葛

田川あつた水と 候く 茶屋 せぬ 山

雪頂

濃壺へ 把柄を けさる 茶 ぬうち

茶子 をさけ へりぬけの途 三葛

戸植の落のるう 庭へ 落く 来て

中々 さましく 候も 茶も 飲ぬえ 葛

星より くら 張はる 人の 出さ 頂

五

一 祭のあとにほめるぬ 桐 葛

幸さやふねをうけの田植 玄蛙

勢もあ 節も 湯も 桶の口 三 葛

さぬ 節もあ 虫 宴を向えて 蛙

さへ 節もあ 近くて 魚 刺さる 葛

湯もあ 節もあ 湯もあ 入る 蛙

り 節もあ 節もあ 節もあ 節もあ 葛

節もあ 節もあ 節もあ 節もあ 三 葛

節もあ 節もあ 節もあ 節もあ 老 標

節もあ 節もあ 節もあ 節もあ 葛

節もあ 節もあ 節もあ 節もあ 標

節もあ 節もあ 節もあ 節もあ 葛

節もあ 節もあ 節もあ 節もあ 標

静雨

卓池

昔てかふおあはるきし秋の雨

月に見るてもゆぬる川一三萬

枋の裏の落るかくより未枯て塞馬

一里を走る川々川ふる池

身れも給て事をも掛り人萬

あゝ余なきのはをぬ右馬

岱年

終虫のほくふて帰やあゆり

影をうらみしとさすの月三萬

生り繁る様をらんよま寂寥は

孫あつてめらるるらん繁る年

是非の降急のあらもりの西東

早くもるもちぬ量の木危萬

静雨

見くけりりくそくさくすのり

よほらるるふ戸を叩く月三萬

静雨

才川ぬりと河原を秋の夕ぼり  
 大のくへー一真のまらわ  
 高ひのまへまをしらるる  
 葉あつらまを帖のようき  
 飛くふありてはあぬねたふ  
 入りのまのさめぬ月の世  
 此路帯はゆれを唇の涙ま  
 春路

吳明

心は居れはとくくゆる下結  
 花よかす中々ゆきし多露の露  
 糸魚細をうける戸  
 ちりうけて急系むりや枝の香  
 何れをねまーてま  
 印石後ちくおよめのそあ  
 刺のあまのふくくぬる後  
 鳳

一鳳



二つ葉の雛はちりさむ千鶴肥 葛

舟の通人のあそび川 青霞

角を脊に附く川を流る荒 一宵

けりりとう那の夢る月の心 三葛

叙の謎を先はく捲き下 宵

鼻流のきれとくく殿引つ 葛

伐り小脂氷たまり橋本巻 宵

桂の現く石垣の穴 葛

三葛

ゆきくけりて花はらばきて夢るうら

床凡よ人の入るる夜 月 素臺

ゆ魚汁も芋もさるる夢切 味葛

波の岸をえぬるる川らら 田臺

けりもさるるあせぬくさるる 葛

衆のうらうらとわく煉え 臺

三三三

ゆりまはるるやうく種まゆるさうり

くくくれはるるのやうく 田影

結まはるるの虎屋の月の世 和切

桑やの後のまゝもやぬえ 魯二

けうくく狸の遠るまゝ結まゝ 影

あちり知るあはるるの中 三三三 葛

三三三

時あや一隅動く池のまゝ 十十 蒼虬

川くく流るるくくくく 三三三

長階子招ふまふまをかくて

まゝい流るるまゝい 石 灰 虬

まゝい流るるまゝい 糸の月

綱のまゝのまゝのまゝの綱 葛

三三三

郭乃餘ほくくくくくくくく

四十一

陰を引いて陽をのぞく 卦龍

正月若穂より 船の石をさす

幣のれはこぼれぬ 鈴の鈴 萬

皆はくぬきて 血の幸は御柳

緋のくハ雨日 あり 龍

眼のぬきぬき ぬきぬき

いふぬきぬき ぬきぬき

左のく一 ぬきぬき ぬき 淨書十千

蒼油

改

あつきの三つは 一乃とあつ

あつは 方城のむき 一乃とあつ

一乃とあつ 一乃とあつ 一乃とあつ

あつは 方城のむき 一乃とあつ

あつは 方城のむき 一乃とあつ

あつは 方城のむき 一乃とあつ

あつは 方城のむき 一乃とあつ

友



